



小和田 哲男さん

[歴史学者]

歴史番組や書籍の解説・監修でおなじみの小和田哲男さんは、戦国時代の武将の史実から現代に生きるヒントをわかりやすく伝え、歴史を学ぶ楽しさを伝える活動をされています。今回は歴史を学ぶ意味や子どもたちに興味を持たせるヒントを伺ってみました。

先生にほめられたことで 自分に自信がもてた

私には恩人が二人います。一人は歴史好きだった母です。家には歴史の本がたくさんあり、よく本を読んでくれました。おかげで自然と歴史に興味をもち、歴史が好きになりました。

もう一人は小学校5年生のときの先生です。国語の授業のときです。先生が黒板に「人」という字を書き、「普通は“ひと”と読むが、上に他の漢字がくると、狩人のように“うど”と読む」と説明され、誰か他にその例を知っているかと問いかけました。

私は、授業の少し前に『平家物語』を読んでいて、「落人」という言葉があることを知っていました。しかし当時の私は、内気で、いつも小さくなってうつむいているような子ども。普段なら、手を挙げるなんてとてもできません。ただそのときは、勇気を振り絞って手を挙げました。

先生は、私に意味を説明するよう言われました。私は、落人とは源平合戦で敗北して山間部などに逃げ延びた平家の人たちで、山奥には今も落人の集落があると説明しました。すると、先生は大いに感心し、「きみは歴史博士だね」とほめてくれたのです。

これはとても嬉しかったですね。先生のその一言で、それまで大人しくて引っ込み思案だった私は、「歴史だけは誰にも負けない」という自信をもつことができました。

北条時宗に思いをはせた遠足の思い出

5年生の遠足で、鎌倉に行ったときのことも鮮明に覚えています。

円覚寺を訪れると知った私は、事前に図書室で北条時宗の伝記を借りて読んでいました。円覚寺は、禅宗に帰依していた時宗が創建したお寺です。

円覚寺の石段を登るとき、私は、中央部分が少しへこんでいるのに気付きました。「こんなにへこんでいるのは、昔から今までに大勢の人がここを通ったからだろう。もしかしたら、北条時宗もこの石段を歩いたかもしれない」。私は石段を歩いたときの感想を、遠足の作文に書きました。

先生はその作文を皆の前で披露し、「歴史を追体験できた喜びにあふれている」と絶賛してくれました。歴史が好きで、作文も好きな私が、歴史家をめざす第一歩となった出来事でした。

すべて人が歴史の構成員

歴史を学ぶために大学に入学した頃、なぜ中世史を専門にするのかと訊かれたことがあります。過去のことを学んで何になるのかというのでしょうか。

過去の経験は、人間が生きていく上で必ず生きてきます。例えば戦国時代というと、戦の勝ち負けだけに目が行きがちですが、武将の領国経営が今の企業の経営のヒントになったり、組織の中で人を動かすためのリーダーシップ論につながったりします。歴史はただの「過去」ではなく、今を映し出す「鏡」であり、そこに歴史を学ぶ意味がある

のです。

歴史は、当時の権力者だけが動かしてきたわけではありません。実際には大勢の庶民が精一杯生きて力を尽くしてきた。それこそが今につながって歴史となっているのです。それがわかれば、歴史がもっと身近に感じられると思います。地域の郷土史家らの力も借りながら身近なテーマを取り上げた授業を行えば、子どもたちも興味をもちやすいでしょう。

また、歴史の「結果」だけを教えるのもつまらないですね。史実を教えるのは大切ですが、「なぜそうなったのか」を考える授業を行ってみてはどうでしょう。例えば「もし、ここで違う選択をしていたらどうなっていたら？」と、「ifの歴史」を考えてみるのもワクワクしておもしろいと思います。

いいところを見つけて 子どもたちの「芽」を伸ばそう

先生の役目は教科を教えることだけではありません。むしろ子どもたちの伸びる「芽」を見だし、それをほめて伸ばす手助けをすることの方が大事だと思います。実際に今の私があるのは、先生に「歴史博士だね」と感心され、遠足の作文をほめられ、作文の才もあると気づかせてもらえたからです。

人は、ほめられると嬉しいもの。ほめられたことは自ら進んで学ぼうとするし、その記憶は決して忘れません。ぜひ子どもたちそれぞれのいいところを見つけ、自信をもたせるようにしてあげてください。

PROFILE

おわだてつお●1944年静岡県生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。静岡大学名誉教授。公益財団法人日本城郭協会理事長。専門は日本中世史、特に戦国時代史。「秀吉」(1996年)、「麒麟がくる」(2020年)など、NHK大河ドラマで時代考証を、小学館「まんが学習人物館」シリーズなど、多くの歴史書籍で監修を務めている。著書は「家訓で読む戦国 組織論から人生哲学まで」(NHK出版新書)など。

歴史を学ぶとは過去を 今に活かすこと